

## サン・ファン・パウディスタ

今回、石巻を訪れたのは2回目であり、初めて訪れた時のことは駅前のマンガロードなどについて、本ホームページで文章も書かせて頂いた(なかなかの酷評モノではあるが)。その時、一旦東京に戻ってきてから、なんだかんだ石巻を振り返ろうと思い、ネットで色々調べてみたところ、サン・ファン館という謎のテーマパークのようなものがチラホラ目についたのである。



そんな矢先、10月の体育の日の3連休を使って、再び石巻に行くことになったので、せっかくの機会ということもあり、このサン・ファン館を訪れることにした。サン・ファン館というのはわかりやすく言えば宮城県慶長使節船ミュージアムである。では『慶長使節』とは何かというと、私自身、日本史は大の苦手であったので、おさらいすると、1613年に仙台藩主の伊達政宗が仙台でのキリスト教容認の条件と引き換えにメキシコのノビスパニアとの直接貿易を求め、スペインのイスパニア国王およびローマ法王のもとに派遣させた使節のことを『慶長遣欧使節』というのである。彼らは仙台で建造されたガレオン船「サン・ファン・パウディスタ号」で航海にでる。この時、使節に選ばれた人物の中にかの支倉常長がいた。支倉常長には海外経験があったという説や上級の家臣でなかったこ



船内 常長の部屋

となどが選ばれた理由ではないかと考えられている。サン・ファン・バウディスタ号には他にも有名なルイス・ソテロというスペイン人宣教師も乗船していた。この人物がサン・ファン・バウディスタの造船や外国に使節団を送ることを伊達政宗に提案したのではないかといわれている。



どうでもいい情報かも知れないが、私の死んだ祖母は生前三重県に住んでおり、少し離れたところに『パルケ・エスパーニャ』というスペインをテーマにしたテーマパークがあった。今回の調べ物でやたらイスパニア(エスパーニャ)という言葉がでてきたので、調べてみるとスペイン語でスペインという意味の様である。ちなみに『パルケ・エスパーニャ』の「パルケ」はスペイン語で公園という意味の様である。

面白いのが、当時のスペイン帝国は世界最大の植民地帝国であり、ガレオン船の建造技術は国家の最高機密であったとされている。その技術を国外に漏らしたものは死刑にされたぐらいである。それなのに何故ルイス・ソテロは日本でこんなガレオン船を造船させたのだろうか。その点、私も答えが見つけれなかったもので、ぜひ知りたい。

またサン・ファン・バウディスタ号は『伊達丸』や『陸奥丸』とよばれていた説もある。『伊達丸』に関しては、なんとなくわからなくもないが、なぜ『陸奥丸』と呼ばれていたのかというとそれは旧秋田藩が資金などの面で影の主役といわれているがゆえであるという。



あるインターネットのサイトによると、日本で一般的に、この船が「サン・ファン・バウディスタ号」と呼ばれるようになったのは戦後の様である。それまでは、「陸奥丸」と呼ばれていたようであるが、欧米志向の学者達の影響で、現在





は「サン・ファン・バウディスタ号」という呼ばれ方が定着したようである。そしてこの「サン・ファン・バウディスタ」という船名だが、(Sant Juan Bautista)、すなわち洗礼者 聖ヨハネのことみたいである。

サン・ファン・バウディスタ号は約 180 人の使節を乗せて、1613 年にローマを目指し、宮城県の月浦を出帆する。サン・ファン・バウディスタ号自体、実はメキシコのアカプルコにまでしか行かない。そこから先はスペイン艦隊に便乗してローマへ向かった。2 年後に、一旦日本に帰ってくるも、1616 年には再びアカプルコへ向けて出港する。

ちなみにこのサン・ファン・バウディスタ号、マニラでスペイン艦隊に売却を余儀なくされてしまったことから、常長らは 1620 年、マニラから別の船で日本に戻ってきたといわれている。サン・ファン・バウディスタ号がその後どうなったのかというのは不明である。

しかし、日本に戻ってきた常長らを待っていたのは徳川幕府による禁教令であった。なんとも皮肉な話である。常長達が日本に戻ってきたとされる 1620 年、日本への潜入を企てていたスペイン人宣教師 2 人が見つかり、結果、この宣教師 2 人、およびマニラから彼らを日本へ乗せてこようとした船長の平山常陳じょうちんを含む船員 13 人が処刑されるという出来事が起きる(平山常陳じょうちん事件)。この一連の出来事をきっかけに徳川幕府はより一層キリシタンに不信感を抱くことになった。常長が病死した 1622 年、当時、捕らえられていた宣教師ら、また彼らを匿っていたとされる人間計 55 人が長崎にて処刑される。これは元和の大殉教と呼ばれ、日本で最も多くのキリシタン信徒が同時に処刑さ



れた出来事である。1624年には、前述したルイス・ソテロも火刑により殉教した。ついで  
といっちはなんだが、「殉教」つながりで1597年に、日本では二十六聖人の殉教という出来  
来事もあったようである。これはかの豊臣秀吉の命令により、26人のカトリックが磔<sup>はりつけ</sup>の  
刑で殺されたという出来事である。なんとも気の毒な話である。こういった出来事が日本  
の歴史において、どうやら結構存在していたみたいであるが、恥ずかしながら、私は今回調  
べていてはじめて知った。私が高校の時にちゃんと日本史の教科書を読んでいなかったせ  
いかもわからないが、私がこういった類でせいぜい知っていたのは「踏絵」と「天草四郎」  
くらいである。そもそも考えてみれば、「サン・ファン・パウディスタ」というのを授業で



2011年3月11日のサン・ファン館

習ったかも覚えていない。昨今は、学  
校で現代史をやる時間がないという  
ことが、問題にはなっているが、確か  
に考えてみれば限られた時間の中で  
こういった出来事を隅々までやるこ  
とは不可能に近いことなのかもわか  
らない。話が少しそれるかもわから  
ないが、こういった一連の歴史上の  
出来事を調べていて、「殉教」という  
言葉がやはり引っかかる。私は「殉教」

という言葉の響きが好きである。それはおそらく「殉教」というものにある種の神秘性みた  
いなものを感じているからなのかもわからない。以前、私は『マターズ』というフランス  
映画を観たことがある。このタイトルの「マターズ」(Martyrs)というのがまさしく「殉  
教者(達)」という意味のようであり、ギリシャ語で Martyria は「証」を意味し、そこから  
きているみたいである。宗教的な理由で、命を失うということが果たしてどういう意味を  
持つのか。彼らにとって、信仰とは一体何であったのか。果たして彼らは、死後、どうい  
つた世界を目の当たりにすること  
となるのか。その他にも、十字  
架に磔<sup>はりつけ</sup>にされたイエス・キリ  
ストも、「殉教者」ではないのか  
といった疑問まで私は感じてし  
まうのである。

話は少し脱線してしまった  
が、こうしてみると正直、



震災で破損したマストの一部



慶長遣欧使節は何か成果をあげることが出来たのかというのが疑問になる。実はサン・ファン・バウディスタ号というのは、日本で初めて太平洋を二度航海した大型帆船である。また慶長遣欧使節自体、日本で初めて太平洋、大西洋の横断に成功し、ヨーロッパの国で外交交渉を行った使節なのである。そもそもの目的であった宣教は失敗に終わったが、確かに日本人として立派な偉業を成し遂げたと言っても良いのではないだろうか。



前回のレポートでも書かせて頂いたが、石巻は2011年の震災で甚大な被害を受けたことから、メディアなどでもよく取り上げられ、ある意味で記憶に新しい場所である。海に隣接しているこのサン・ファン館も実は津波で派手にやられたことから一時は絶望的な状態にまで陥ったというのである。まず、津波によってサン・ファン号の周りを囲っていたドッグ棟が破壊され、ほとんどの展示物を洗い流してしまったという。実は、この時点ではまだサン・ファン号自体はそこまで破損されなかったものの、その後、4月に起きた台風によって、フォアマストならびにメインマストが折れてしまい、派手にやられてしまう。施設の1番の目玉のサン・ファン・バウディスタ号が結局、天災によってボロボロにされたのである。



私達が訪れた際も、サン・ファン号に向かうエスカレーターを下っていると、「津波到達地点ここまで(8m)」と書いてあるボードがあった。確かに8mと言われてもあまりピンとこないが、自分が海の方に下っていくエスカレーターに乗っていて、「この地点まで波がきた」と言われると、確かに怖い。結局、サン・ファン・

バウディスタ号は2013年に修復が完了し、同年11月、実に2年8か月ぶりにサン・ファン館が再びオープンすることとなった。

サン・ファン館には行けたものの、時間の関係上、資料館などは見ずに、サン・ファン号だけを見学することとなった。こうやって書いていて、次から次へ新たな疑問が出てきたので、正直、今、ものすごく後悔はしているものの、確かにサン・ファン号だけでも一見の価値はあったし、感動もした。繰り返しになるが、私はそれまでサン・ファン号なんて聞いたこともなかったし、ましてや宣教の目的でこういった船が造船されていたとは想像すら

してなかった。昨今は、近隣諸国との間で歴史認識の違い(?) から色々とめんどくさいことになっているとメディアは報じているが、確かに歴史を知らない人間は色々な意味で危ないのではないかと感じる。日本各地を旅していたら、こういった場所を発見できる機会は非常に多いので、日本史の知識を蓄えるチャンスにもなるし、やはり旅先での出来事である以上、忘れることなく永く覚えていられるのではないだろうか。疲れるかもわからないが、死ぬまでに日本全国の資料館を攻めて、苦手だったはずの日本史を達人レベルにまでもっていけるのではないかと、今のどこかで新たな計画が芽生えた。

ウェバー伊安